

「見知り」と「感覚データ」再考

中釜浩一

序.

すべての偉大な哲学者と同様に、ラッセルもまた、現代の目から見れば、愚かしく不合理だと思われるような様々なことを言っているように見える。「見知り」acquaintance や「感覚データ」sense-data に関するラッセルの主張は、そのような現代の目からすれば不合理で愚かしく見えるものの一つと見なされているかもしれない。しかし、しばしば起こることだが、現代の目から見れば愚かしく思われるような主張であっても、その主張をなした当の哲学者の思考の文脈（なぜそれが問題となり、どのような道具立てでその問題を解こうとしたか）を考慮に入れるなら、それは少しも愚かしくも不合理でもないことが判明することがある。さらに、時には、そのような思考の文脈は、よくよく考えてみれば、現代の目から見ても十分に理にかなったものであり、したがって、一見愚かしく思えた主張自体も、実は少しも愚かしいものではなく、たとえそれを問題に対する最も合理的な立場として支持することは難しいとしても、少なくとも有力な生きた選択肢として提示することが可能であるような場合がある。ここで行いたいのは、ラッセルの「見知り」と「感覚データ」に関する主張が、そうしたケースの一つではないかを調べてみることである。

1. 思考

まずは、基本的な問題が何であるかを、ラッセルの思考の文脈からは独立に考えてみよう。それは、われわれ人間が「思考」というある特異な心的状態を持ちうる、という事実由来するものである。

思考を持つということは、合理的存在者としてのわれわれの顕著な特徴であり能力である。思考は「内容」を持ち、そのことによって、特殊な仕方ですれを持つ主体の振る舞いに影響する。すなわち（1）思考は、世界の中の事実と照らし合わされることによって、真だ（正しい、適切だ等）とか偽だ（誤っている、不適切だ等）とかと評価され、また（2）主体は、まさに当の内容を持つ思考を抱くことによって、その後の振る舞いに関して非因果的違い（単なる因果法則によっては説明するのが極めて難しい違い）を生じさせる傾向がある。

ここから生じてくる基本的問題とは、ある思考がある内容を持つとは、あるいは、ある内容の思考がある特定の事実と照合されるとは、どのようなことであり、どのようにして

なのかを説明するということであり、そしてまた、主体がある内容の思考を持つということが、主体の持つ他の認知的諸能力（知覚、記憶、言語使用等の能力）や運動し行動する身体的諸能力と、どのような関わりを持つのかを解明する、ということである。

思考の内容は、一般に、命題的なものだと考えられている。それは、一つには、上で見たように、思考が真や偽等々として評価されるものだからである。真偽が語られるのは、命題的性格を持つ何かであるだろう。もう一つの理由は、思考の内容がある個人から別の個人へと言語的に伝達可能だと考えられているからである。言語的伝達の単位は文であり、文で表現可能なものは何らかの命題的構造を持っていなければならない、と考えたくなるだろう。

一方、思考の内容が事実と照合されるのは、その内容の中のある要素が、事実のある要素と突き合わせられることによってである、と考えられる。仮に思考の内容が「F a b」という文で言語的に表現できるようなものと仮定すると、指示表現（名前）a, bに対応するような何らかの要素が思考の中にあり、それらの要素が、当該の思考の主体が世界のどこを見ればよいのか、当の思考を評価するためにどの事実を選び出せばいいのか、を指図する。言いかえると、a, bに対応する思考内容の要素が、世界のどの対象に焦点をあてればよいのかを示し、それら焦点を当てられた対象の間で、述語Fで表現される関係が実際に成り立つのか否かを見ることによって、思考の内容は真あるいは偽（適切あるいは不適切）と評価される。このことから、思考の内容が、指示表現に対応するものと概念表現に対応するものからなるような、何らかの命題的構造を持たねばならないことが帰結するように思われる。

思考が特定の内容を持つということ、上のように考えるなら、思考の能力と他の認知能力、特に知覚能力との関係は、全く端的なものになるだろう。われわれは、好適な条件のもとでは、ある特定の対象を「注意」によって周りの環境から区別して知覚し、また一定時間同じその対象を知覚的に追跡する能力を持っている。この能力によって、われわれはその対象に「ついて」思考することが可能になる。われわれはそのような仕方では知覚的に同定された対象に対して、われわれの持つ概念的レパートリーの中から一つ概念を適用し、そしてそのような対象と概念とによって特定される内容を持つ思考を、上述の仕方ですら事実と照合することによって、その思考内容を評価する。

「注意」は、注意の向けられる先にある対象からの刺激・情報に選択的に反応する、ということばかりでなく、まさにその対象に対して選択的に行動する傾向とも結びついている。知覚入力（行動出力）に対して、その入力に対する概念的処理よりも「系統発生的により古い結合」を持っているだろう（Evans 1982, p158. Evans はこれを知覚情報の持つ「非

概念的な内容」と呼んでいる)。知覚情報の非概念的内容は、知覚対象についての思考内容(概念的な内容)が事実と照合される際に前提されており、その意味で、心が対象を指示・同定する能力は、心がそれらについて思考する能力に先立ち、後者によって論理的に前提されている、と考えられる。

もちろん、われわれの持つ思考のすべてが、上のような端的な仕方では知覚される事実と照合されるわけではない。しかし、概念間には一定の論理的・事実的關係があり、そうした関係を何らかの仕方では知ることを通して、直接には知覚的事実と照合されるのではないような思考内容を、間接的に評価することができる。ここで直接的とは、概念間の関係に基づく推理を介さないということであり、間接的とはそのような推理を介するということである。

以上のような思考に関する説明の概略は、「見知りによる知識と記述による知識」(1911)や「哲学の諸問題」(1912)の時期のラッセルの基本的考えとほぼ整合的なものである。実際、上のような考え方は、ラッセルのアイデアを敷衍し精密化したと見なしうる Evans の議論にはほぼ基づいている。その一方で、ラッセルの思考に関する考えには、現在の目から見れば、愚かしく不合理だと思われるかもしれないような要素が確かに認められる。その一つは、見知りの対象が「感覚データ」だという考えである。

2. 見知り

ラッセルは「哲学の諸問題」の見知りによる知識と記述による知識を扱った第5章で、見知りによる知識に関する議論の要約として次のように述べている。

かくしてわれわれは、存在する事物の見知りに関して言われてきたことを以下のようにまとめてもよいだろう。われわれは感覚において外部感覚のデータの見知りを持ち、内観において内部感覚と呼ばれてよいようなもののデータの見知りを持つ。・・・われわれは、個別的な存在者を見知りに加えて、われわれが普遍と呼ぶようなものを見知りをも持つ。・・・われわれが見知っている対象の中には、(感覚データと対比される)物理的対象も、他人の心も含まれていないことが見られるだろう。これらのものは、私が「記述による知識」と呼ぶものによってわれわれに知られるのである・・・(p.52)

見知りの対象を感覚データとすることは、ある意味で、直接的知識の対象を心の内部の存在に限ることのようにも感じられる。なぜなら、感覚データの存在はそれを抱く心の存在に依存している、とラッセルは認めているからである。また、物理的対象が記述によっ

てのみ知られる、という主張は、客観的世界に存在する事物をわれわれは直接には知ることができず、それに対しては、何らかの主観的表象を介して、間接的・蓋然的な知識しか得られない、ということを含意しているかのようにも見える。ラッセルの主張をこのように読むならば、彼の企図をデカルト主義的な問題の枠組みの中に置くことがごく自然なこととなるだろう。すなわち、主観的に確実な観念に関する知識から、いかにしてわれわれから独立な客観的世界の知識に進むことができるのか、という問題設定の中で、ラッセルの議論は解釈されることになるだろう。「主観主義的基礎付け主義」あるいは、「現象主義的還元主義」と呼ばれるようなタイプの議論は、現代の目からすれば、しばしば不毛で不合理的な議論と見なされがちである。

またラッセルは、われわれが一般に用いるほとんどの事物の「名前」が、そうした事物が見知りの対象とはなりえない故に、真の固有名ではなく、実際には記述の省略であると主張した。そしてラッセルは、真の固有名（論理的固有名）は「私」や「これ」のような指標的指示表現に限られると見なした。このような主張は、名前の意味に関する「記述説」と称せられ、特に様相文や信念文をはじめとする内包文脈での「名前」と「記述」との論理的振る舞いの違いを正しく説明できず、また通常の名前と指標語との根本的な意味論的区別を理解しないものとして、クリプキやカプランら以来厳しく批判されていることもまた周知のことである。

後に見るように、このような解釈はラッセルによって意図されているものではないだろう。何よりもラッセルは、「感覚データ」をパークリーのような観念論者のいう「観念」から区別して、ある種客観的な性格を持つものにとらえており、そのことを明確に論じているのである。だがこの点を検討する前に、上のような見知りと感覚データに関する主張が、この時期のラッセル自身の哲学の内的動機に照らしても、彼の他の主要な考え方と一定の緊張関係にあるように思われることを見ておこう。

元来、思考の内容に関するラッセルの考え方は、きわめて「直接実在論的」であった(Hylton 2005, p.159)。「数学の諸原理」(1903)からしばらくの間の時期のラッセルは、判断を、主体と命題との間の二項関係と考える。命題とは、「項」からなる特殊な複合的統一体である。「項」とは命題の主語となりうるような任意のものであり、名詞で指されうるようなものはすべて項だと考えてよい。ラッセルにとって命題は、言語的あるいは心的存在者ではない。それはこの世界を構成する部分的複合体であり、命題に生起する項とは実物の対象そのものである。たとえば、「富士山は日本最高の山である」という文に対応する命題は、富士山それ自体をその項として含むようなある特殊な複合体である。すなわち、この文であらわされている真な命題とは、この文で語られている事実そのものと等しい。

一方、「見知り」とは主体と対象との間の、最も基本的で直接的な認識的二項関係である。主体（心）は対象との間に、「見知り」という関係に入りうる。見知りは対象の主体への「現前」の逆関係であると言われる。対象の見知りを持つことは心の持つ最も基本的な能力であって、何か他の能力によって説明されるものではなく、逆にそれによって主体の持つ認識能力が説明されなければならないような能力である。対象を見知る主体は、対象に関する直接的・無媒介的な知識を手に入れる。もちろん、その対象に対して後に様々な命題的知識を獲得することはありうるが、対象そのものを知ることに関する限り、見知りによる知識は完全である。

主体がある命題にあらわれる項をすべて見知っている時、その主体はその命題を見知る、と言われる。事実が真な命題に他ならないことを考えるなら、真な命題を見知るとは事実を見知ることと同じである。主体は命題に生起する項を見知ることによって、その項からなる事実との間に直接的・無媒介的な関係に入る。

ラッセルは、「哲学の諸問題」の時期には、いくつかの困難から、上のような命題に関する考えを捨て、その代わりに、判断や理解の「多項関係説」と呼ばれる考え方を抱くようになる。直接実在論的命題概念の持つ一つの困難は「偽な命題」の身分をどのように考えるか、ということに関わっている。もともとラッセルの考えによれば、偽な命題も真な命題と同様の複合的統一体であり、その存在論的身分は同等であるはずである。真偽は命題にとっては偶然的な性質にすぎない。このような考え方は真偽の区別を説明不可能なものとし、実在する世界の中に、真な命題すなわち事実とともに、「偽な命題」という形而上学的に疑わしい存在者を認めることを帰結する。こうした困難を免れるために、ラッセルは命題を存在者としては認めないという立場を取るようになる。その際判断は、心と命題との間の二項関係としてではなく、心と判断内容に含まれる諸対象（項）との間の多項関係として考えられることになる。たとえば、「私はaがbを愛していると判断する」は、私、a、愛、bという諸対象の間に「判断する」という多項的關係が成り立つことだ、と説明される。これが判断の多項関係説である。ここでは命題の存在は解消されているが、多項関係説においても、判断の項は、最終的には見知りによって与えられなければならない、と依然として考えられている。

さて、上のようなラッセルの命題（後には判断）と見知りに関する考え方の中には、フレーゲ的な「意義」が入り込む余地はない。フレーゲによれば、意義は、ある仕方で、主体と対象とを媒介するものである。どのような表現も意味 *Bedeutung* と意義 *Sinn* とを持つが、主体はその表現の意義を理解することを通してのみ、その意味を指示することができる。意義は対象の与えられ方であり、われわれがある言語表現を理解するときに理解さ

れているのはその意義である。特に文の意義は「思想」と呼ばれ、それが主体の持つ思考の内容をなす。事実とはある思想を真や偽とするものである。すなわちフレーゲでは、思考の内容は思想であり、その成分は、ラッセルのように思考の対象そのもの（思考の内容の真偽を決定するもの）ではなく、その意義である。フレーゲでは意義や思想は、心理的なものとも物理的なものとも違う、実在し客観的な何かであるが、フレーゲ的道具立ての中では、主体（心）が事実そのものを見知り、というようなラッセル的事態はありえないだろう。

ラッセル的な直接実在論には、いくつかの明らかな困難がある。主要な困難は、まさにフレーゲが *Bedeutung* に加えて *Sinn* の概念を導入した理由と関わる。われわれは存在しない対象について思考することができる。また、同一対象を指す異なった名前を用いた同一性言明であらわされる命題は、単なる同一律の事例以上の情報価値を持ちうる。さらにわれわれは、一般的な内容（「すべて」や「ある」のような量化表現が関わる内容）の思考を持つことができる。こうした思考の可能性を、見知りに基づく直接実在論によって説明することは極めて難しく思える。存在しないものを見知ることにはできそうもない。対象そのものが見知られるのであれば、対象の同一性も直ちに見知られるはずであり、情報価値のある同一性命題は存在しえないはずである。「すべての数」や「ある（不特定の）人」を見知るとはどういうことか、理解しがたい。こうした問題に対してラッセルは、まずは *Meinong* 流の *subsistence* の概念や、後には表示 *denoting* の理論によって、そして最終的には記述 *description* の理論によって、答えようとした。しかし、こうした展開において、われわれの認識は最終的に見知りに基づくという「見知りの原則」や、われわれの思考は対象そのものに関わるという直接実在論の動機は、一貫して保持されている（表示の理論が記述理論にとって代わられた一つの理由は、表示の概念が直接実在論のとうまく整合しなかったからである）。

だがその一方で、ラッセルは見知りの対象を次第に制限していき、上の引用で見たように、「哲学の諸問題」の時期には、それを感覚データ、記憶、内観、自己、普遍に限り、物理的对象や他人の心は見知ることができない、とされている。もしも感覚データが、「観念」に類した心的な存在者だと解釈されるなら、ラッセルの立場は、直接実在論的であるどころか、まさに思考の間接性を主張しているように思われるだろう。すなわち、感覚データが心の内部にのみ存在し得るような何かであるならば、そして、われわれの知覚的認識が最終的には感覚データの見知りに帰着されるならば、われわれは決して客観的事実を直接知ることができない、と言わなければならないだろう。われわれの思考は、結局のところ、われわれ自身の心の内部に閉じ込められているのであり、「外部」への通路は、

「記述」(すなわち、「ある」や「すべて」と同様な量化)によって与えられるだけである。ここで、ラッセルの記述理論が、見知られていない対象に関する「ものの知識」を、量化表現を用いて「見知りの対象」にのみ言及する知識へと還元する方策を与えているとしても、量化表現に対応する見知り(一般性の見知り)が一体何であるのかに関して、何も説明を与えていないことにも留意すべきだろう。

こうして、知覚においては感覚データのみが見知られる、というラッセルの主張は、現代的な思考の文脈に置いた場合に深刻な問題を引き起こしうるだけではなく、彼自身の考えの基本的方向とも整合しないように見える。だがそれは、これまでしばしば示唆してきたように、感覚データが観念に類した心的存在者だと理解する限りのことである。しかし感覚データをそのように理解することは、まさにラッセル自身の意図とは正反対のことなのである。

3. 感覚データ

ラッセルの言う感覚データが観念に類した何かである、あるいは、単に観念と言う語を現代風に言い換えたものにすぎない、という理解は、現在でもごく一般的なものだろう。ラッセルの著作から40年ほど後に書かれたAyerの「知識の問題」やAyer説の批判であるAustinの「感覚と感覚可能者」においても、ほぼそのように理解されているようである。実際、ラッセル自身が感覚データの例として挙げるのは、知覚対象の具体的感覺的性質(たとえば、ある机の特定の色合い、音、触感等々)であり、これらはまさにバークリーが感覺可能な性質(すなわち観念)と呼んだものと一致している。さらに、もともと感覚データの概念は、「見かけ」appearanceと「実物」realityとを区別するための道具立てとして導入されている。常識的言い回しに従うなら、見かけは単に心の中にしかないが、実物は心の外側に本当に(客観的に)存在するものだ、と言いたくなるだろう。しかし一方、ラッセルは「哲学の諸問題」の中で、バークリー流の「観念」の概念とそれに基づく観念論を厳しく批判し、同時に感覚データが心的な何かであることを極めて明確に否定している。ラッセルは、バークリーが、対象が「心の前」before the mindにあることと、「心の中」in the mindにあることを混同している、と批判する。さらにラッセルは、「感覚データの物理学に対する関係」(1914)という論文では、感覚データや「感覺可能者 sensibilia」(認識主体と見知りの関係に入ることによって感覚データへと現実化する可能性をもつような存在者)を、「物理的」なものだとさえ主張している(Russell 1963, p.145)。これは何を意味しているのだろうか。

中心にある考えは、「見知り」が主体(心)と対象自体との基本的な二項関係である、

というラッセルの根本前提であるだろう。心は「心の中」にあるものだけを見知るわけではなく、また対象は、心と見知りの関係に入る（「心の前」に立つ）ことによって、心的なもの（心の中にあるもの）となるわけではない。その限り、感覚データを心的なものであると考える理由はない。しかしその一方で、先に触れたように、感覚データの存在は、それを見知る心の存在に依存していることをラッセルは認めている。見知られていないような感覚データは存在しない。そして、感覚データは物理的対象とは異なり、感覚データの存在する空間は、物理的対象の存在する空間とは異なると主張されている。まとめて言えば、感覚データは、一方で観念のように心的なものでもなく、他方で机のような日常的对象や原子のような科学的対象と同じ意味で客観的なものでもない。またそれは、「心の中」に存在するわけではないが、日常的・科学的対象と同じ空間に存在するわけでもない（それは知覚的空間に存在する）。さらにそれは、心と見知りの関係に入る客観的な何かであるが、しかしその存在は心の活動に依存している。はたしてそれは、どのような身分を持つ存在者なのだろうか。

ラッセルの感覚データの概念を理解する鍵は、それが常に「視点」point of view や「立場」standpoint といった概念とともに言及されている、ということである。「哲学の諸問題」の冒頭付近では次のように言われている。

われわれが見出したことから明らかなように、テーブルのその色として卓越してあらわれるような色などない……それは異なった視点からは異なった色としてあらわれる……
この色は、テーブルに内在する何かなのではなく、テーブルと見る者と、光がテーブルに当たる仕方とに依存する何かである。(p.9)

また、後には、

すなわち、それら[第一章のテーブルに関する議論]が証明したのは、正常な目がテーブルと相対的にある点に置かれたならば、一定の光の中で、ある色が存在するだろう、ということである。それらは色が知覚者の心の中にあることを証明したのではなかった。(p.41)

ここで言われている点は、上で触れた「感覚可能者」の概念を考えることで、より明確になるかもしれない。それを見知る心なしには感覚データは存在しえないが、心と見知りの関係に入ることなしにも「感覚可能者」は存在する。その意味で、感覚可能者は心から

独立の客観的存在を持っている。「感覚可能者」は、心によって見知られることで、その心にとっての感覚データとなるが、何らかの心によって見知られるか否かは、「感覚可能者」自体にとっては偶然的なことである。見知りによる知識、あるいは一般に知識が可能なのは、知識が知識を持つ主体から独立に存在するようなものに関わるからである。このような考え方は、ラッセルの直接実在論的知識観から帰結するものである。しかし感覚可能者は、日常的・科学的対象ではなく、それらが存在する物理的空間の中にあるのでもない。それが存在する空間は、知覚的空間、すなわち、ラッセルが「パースペクティブ」と呼んだ空間であり、後に Evans が「自己中心的空間」と呼んだものである。

すなわちここでラッセルが主張していることは、パースペクティブの実在性、あるいは客観性なのである。何か「心の前」にあるということは、それがその心のパースペクティブに入ることであって、「心の中」にあることではない。主体が、ある条件のもとで、ある位置からある方向を向けば、その主体の知覚的空間（自己中心的空間）にある特定のパースペクティブがあらわれるということは、世界の客観的・実在的性質である。

このように考えてくれば、ラッセルの企図は「心の中に関する知識から心の外に関する知識をいかに獲得できるのか」という（粗い意味で）デカルト的な思考の文脈ではなくなく、「パースペクティブ依存的な知識に基づいて、パースペクティブ独立な知識を得ることがいかに可能なのか」という（同じく粗い意味で）ライプニッツ的な思考の文脈でとらえる方が、より適切であるだろう。そしてそのように捉えるならば、見知りと感覚データに関するラッセルの議論は、彼の直接的実在論と不整合なものではないと考えることが可能となるだろう。この方向でのラッセルの議論は「外部世界についてのわれわれの知識」（1914）でさらに展開されることになる。さらに、ラッセルが論理的固有名を指標語と同化した認識論的な動機も理解可能となる。Evans が指摘しているように、「今」、「ここ」、「それ」等の指標語を用いて指示されるものは、自己中心的空間において（すなわち主体との関係において）位置が指定される。一方、「真の名前」が見知りによって指示が確定するようなものであるのなら、その機能は、自己中心的空間における対象を指示するものでなければならぬだろう。したがって、「真の名前」は指標語的なものであらざるを得ないのである。

4. 結語

われわれは、ラッセルの「見知り」と「感覚データ」に関する議論を、デカルト的な問の文脈ではなく、ライプニッツ的な問の文脈に置くことによって、より整合的に、また、より不合理なものではないようなものとして、解釈できることを示そうと努めた。ラッセ

ルの考え方が、現代の思考や言語の哲学にとっても有力な生きた選択肢となりうるかどうかについては、今後さらに検討の必要があるだろうが、たびたび触れてきたような Evans 流の展開が、有望な方向であると思われる。いずれにせよ、よく言われるように、初期ラッセル(おそらく中期や後期についても言えるだろうが)は哲学的アイデアの宝庫である。そこに見られる一見した不合理さ(ラッセルは現代哲学の常識に反する多くのことを言っている)や不整合(ラッセルはしばしば短期間で主張を変えたことで有名である)に惑わされず、それを研究することは、現代の目から見ても、多くの実りをもたらす可能性を秘めていると考えられる。

文献

- Austin, J.L. (1962). *Sense and Sensibilia*, Oxford: Oxford University Press.
Ayer, A.J. (1956). *The Problem of Knowledge*, a Pelican Book.
Campbell, J. (2009). 'Consciousness and Reference', in B. P. McLaughlin, A. Beckermann and S. Walter (Eds.) *Oxford Handbook of Philosophy of Mind* (pp.648-662), Oxford: Oxford University Press.
Evans, G. (1982). *The Varieties of Reference*, Oxford: Oxford University Press.
Hylton, P. (2005). *Propositions, Functions, and Analysis*, Oxford: Oxford University Press.
Russell, B. (1937). *The Principles of Mathematics*, London: George Allen & Unwin.
——— (1986). *Mysticism and Logic*, Unwin Paperbacks.
——— (1997). *The Problems of Philosophy*, Oxford: Oxford University Press.
——— (1926). *Our Knowledge of the External World*, London: George Allen & Unwin.

[法政大学教授・哲学]